子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1994年1月1日発行　[隔月発行]

# 文化高知

'94年1月 NO.57

「早春」　大平武夫

(財)高知市文化振興事業団

# 文化行政のための覚え書

山口　勝己

行政の文化化あるいは文化行政ということが言われ出してから久しくなります。確かに、近年全国各地において文化施設の整備充実が進められてきました。しかし、そうした施設の充実だけで文化行政が進展したといって良いのでしょうか。

文化行政を考える場合、他の行政分野にはない難しさがあります。それは文化行政とは何か、そもそも文化とは何かということが必ずしも明らかではないということです。文化行政という場合の文化とは、文化財という概念に代表される狭いとらえ方ではなく、生活文化という言葉が使われるように広い意味のとらえ方をしているように思われます。広辞苑によると、「文化」とは「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称」、「衣食住を初め技術、学問、芸術、道徳、宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容とを含む」とあります。私なりに言えば、我々のものの見方、感じ方、美意識、生活の作法など、これらもろもろを含めた生き方とでもいう他ないものが文化ではないでしょうか。

そうすると、文化行政は我々の生き方に関することなら何でも引き受けるということになるのでしょうか。しかし、これは土台無理な話です。第一、文化行政も行政である以上目的があり、それに対応した手段がなくてはならない。人の生き方に関しては、行政の対象になりえない、世の中や個々人にまかすべき領域が多いことはいうまでもありません。あるいは人によっては、行政が現在我々の生活のかなりの部分にかかわっていることから、行政全般と文化行政を混同ないし同一視して語る場合もあります。しかし、これは行政全般を文化行政という言葉に置きかえているに過ぎませんし、そこからは文化行政の深化は生まれてこないでしょう。従来の文化財保護といった狭い意味の行政ではない、しかし、どこまでの広がりと深まりを追求すべきかが明確でない、ここに現在の文化行政を語る場合の難しさがあります。

人々の生き方、広い意味の文化を背景として、「美しさ」、「感動」、「潤い」、「ゆかしさ」等が様々の形で具体的に現われ、我々はそれを意識化する。それらを文化的価値とでも名づけるとすれば、文化行政はそういう文化的価値に着目した行政と言えるでしょう。先の目的、手段に即して言えば、その目的は文化的価値を高めること、広げることであり、そのための手段は行政上の様々の手法を活用することです。逆にいうと、行政上の手法を適用しうる範囲で文化的価値とおつき合いするとも言えるでしょう。

このように整理した上で、文化行政の現状を見てみましょう。現在、文化行政で大きな仕事となっている文化施設の整備、運営についても心がけなければならないことがあります。様々の文化施設は、それぞれの目的にそって、人々に、感動したり、学んだり、楽しんだりしてもらうためにあるのです。施設が立派であれば事足れりという訳にはいきません。その施設を拠点として人々の文化的活動が高まり、そして人々の生活の中にささやかながらも「美」や「感動」の余韻が広がっていくことが望ましい姿ではないでしょうか。音楽ホールを例にとれば、それが真に生きた施設となるためには、一流の音楽公演を企画し招へいすることも大事ですが、そこを拠点として、住民が日頃から演奏活動を楽しんだり、音楽教室で学んだりといった市民生活の中への広がりをもつことも大切なことでしょう。

しかし、こうしたことは行政だけで出来ることではありません。そこでは市民が主役であって、行政はいわばコーディネーター、プロモーターの役割を果たすことになるでしょう。

今、県教育委員会では、文化行政のあり方を改めて考え、文化振興のビジョン、指針というべきものにまとめようと思っています。既に、各界の第一線で活躍し、文化に関心のある方々に委員をお願いして熱心に議論していただいていますが、多くの方々と一緒に考えていく中で、文化行政の新たな展望が開けることを期待しています。

（高知県教育長）



# 写真に目ざめたころ

島内　英佑

高知県は〝台風銀座〟として全国的に名を馳せているが、私の生まれ故郷である幡多郡佐賀町も当然のことながら、毎年のように台風の脅威にさらされている。

子どものころ、台風が近づいてくると、わが家のふだんは雨戸を使わない客間の窓にも、納屋から雨戸を持ち出してきてしっかりと閉め、暴風雨にそなえるのが常だった。一年のうちで台風が来襲するときだけ、その部屋は雨戸を使っていたのである。

夜来の激しい風雨も収まり、まぶしい太陽が顔を出した朝、手さぐりで客間へ行くのが幼い私のひそかな楽しみだった。ふすまを開けると、客間は真っ暗ではなく、ほのかに明るい。杉板の雨戸に何カ所か節穴があって、そこから光が差し込んでいるのである。窓の磨りガラスに針穴写真機の原理で、戸外の景色が天然色で逆立ちをして映っている。台風一過の真っ青な空をバックに、庭のミカンの木の緑があざやかに映える。ときどき吹く台風の名残の風が枝をそよがせ、葉っぱがキラキラと光る。少年の私は見あきることを知らなかった。

カメラの原点であるカメラ・オブスキュラはラテン語で暗い部屋という意味で、そもそもは十六世紀のころ、暗い部屋の内部に外の景色を映して楽しむことから始まったものだというが、わが家の客間は、まさにカメラ・オブスキュラであった。私にとっての写真の原点といえるかもしれない。

○

父親は戦前からのアマチュア・カメラマンで、写真屋もない小さな町で育ったのに、昭和十年代の私たち兄弟の写真がたくさんあるのは、父のおかげだと感謝している。

三歳年下の兄は中学のころから父のカメラをいじり始め、暗室作業も父から手ほどきを受けていた。私たち兄弟は小学校を終えると、高知市の土佐中・高校に進み、下宿生活を送っていたが、そのころ写真熱は私にもうつり、夜、豆電球に赤いセロファンをかぶせ、下宿の部屋を即席暗室にして、兄弟で密着焼き付けを楽しんだりしていた。兄が久留米の医大に進んだあとも私の写真熱は衰えず、高校二年の時には写真部を創設したりして、受験勉強そっちのけで写真に入れこんでいた。

高校三年の二学期が始まったばかりの日、父が酒造工場で感電死したという、信じられない知らせが入った。ちょうど、校内水泳大会の最中で、「しっかりせんといかんぞね！」とオロオロと涙声で呼びかける親戚のオバサンの声を受話器から、反対の耳からはプールの声援が同時に聞こえていたのを、不思議に今でもはっきりと覚えている。

○

兄は大学を中退して家業を継ぐことになった。わが家はかつて造り酒屋だったが、戦後は近隣の町の酒屋と組んで会社組織にし、工場は大方町に、そして家では小売りだけをしていた。母は店だけなら自分でやっていけるからと、兄の中退に反対したが、兄の決意を変えることはできなかった。伯父が医者だったこともあり、両親は子どもたちが家を継ぐより、医者になることを強く望んでいたのだ。兄がコースをはずれた以上、当然、私がその役を務めるべきだった。

入試の期日は迫っていたが、ろくに受験勉強もしていないのに医学部にパスすることはとても無理だったし、それよりも私の中で写真の占める割合はあまりに大きかった。医学部に行きたくないなど、母をこれ以上悲しませることはとても直接には言えず、兄に相談した。絵の好きな兄は美大へ進みたかったのを、両親の意を汲んで自分から断念し、医師への道を進みかけていたのだ。兄は自分のできなかった好きなことへの道を弟のために拓くため、母を懸命に説得してくれた。晴れて、私は写真の大学に入学し、写真家への道を歩むことになった。

その兄も、先年父のもとへ逝った。もし、あの時、父が事故にあわなければ、兄も私も医師になっていたのかもしれない。何とも不思議な気持ちである。

（写真家・日本写真学園講師）

# バルザックの杖

千頭　将宏

たまさかの高知市民図書館に出掛ける心の弾む一つの理由に、二階ロビーに飾られた山本茂一郎画伯の油彩「巴里」と題する一枚の絵を鑑賞するにある。というのも、私は同じ構図によって刻まれた銅版画、ボードレールが激賞してやまなかったシャルル・メリヨン（一八二一～一八六八）のシリーズ「パリ風景」一作を所蔵していることによる。もっとも、私の所蔵のは原画でなく、複刻製版に過ぎないけれども。

清楚な女性像や踊子像を描き続けていた山本画伯が、新たな境地を開かんものと渡仏し、歴史の重みあるパリの街路を、己の思想に取り込みながら画布に表現せんとて立ち向かっている姿が浮かぶが、私は、画伯のパリの油彩画は他では一点しか見ていない。それは、マレー地区の十七世紀あたりの建物を描いたかと思われる力作であって、高知県社会保険診療報酬支払基金事務所の玄関に掛けられているものである。

市民図書館の「巴里」は、詳しくは「巴里、サン・テチェンヌ・デュモン教会」である。パリ五区リュクサンブルグ庭園の上方の丘、ルソー、ヴォルテール、ユーゴー、ゾラなどが眠るパンテオンの左側に、この教会がある。教会は、一四九二年に着工、一六二六年に完成したという。十七世紀の哲学者パスカルの遺骨が納められていることで知られているが、私は最近、茂一郎とメリヨンの画に誘われ、胸わくわくこの教会を訪ねた。正面を目の当たりに眺めると、構図においては、両者とも写実に描いているが、予想に反して、ベージュ色の明るい石造建物に意表を衝かれた思いであった。パリの大聖堂、教会というのは、長年の石炭灰の煤やら埃で黒ずんでいるのに、この教会だけは、近年、外壁を清掃したのか、まるで昨日建ったばかりといった様子なのである。笑顔のマリヤ様が右手を挙げて正座している風情である。内陣に入ると、これまた他の教会と違って、非常に明るいのでびっくりしてしまった。天井近くの窓が大きいのか、その日は曇天にもかかわらず、ステンドガラスも眩いばかりの光に溢れ、色鮮やかさに感動してしまった。パスカルの墓碑銘を見学したのち、外に出るとパンテオンの円屋根がソルボンヌの空を圧している。一方、サン・テチェンヌ・デュモン教会の鐘楼塔が、パリ大学を慈愛ぶかく見守っているかのようである。

教会正面のキュジャ通りを下る手前に、二七〇万冊の蔵書を収めるサント・ジュヌヴィエーヴ図書館がある。いかにも歴史を物語る建物で、私もロビーに相当するところに入ってみたが、薄暗くて図書館のような気がせず、すぐ出てしまった。バルザックの『幻滅』（生島遼一訳）には、この図書館に終日席を占め、学究に励む主人公のリュシアンとダルテスの二人の青年の姿が描かれているが、バルザック自身の回想記でもあるのである。その頃（一八一四年当時）のパリには、私設の新聞、雑誌をも備えた有料の文芸図書館が多くあり、一般の人はそこを利用していたことが、やはり人間喜劇諸篇に活写されている。

サント・ジュヌヴィエーヴ図書館の下側は、ボードレールが在籍したルイ・グラン中学校であって、厳めしい石造校舎が広がっている。

サン・テチェンヌ・デュモン教会とパンテオン裏手には、アンリ四世中学校がある。その正門の石塀に沿って東方向に歩み右手に折れると、哲学者の名を冠したデカルト通りに出る。ものの百メートル足らず歩むと、左側三十九番地の建物の一室が、詩人ヴェルレーヌの終焉宿なのである。一階と二階の境目の壁に、記念板を張り付けているので分かるが、その一階に〝ポール・ヴェルレーヌの家〟という屋号の食堂があった。私はその食堂に入りコーヒーを飲みながら、新潮文庫版『月下の一群』



堀口大學訳のヴェルレーヌ詩篇を詠んで、センチメンタル・ジャーニーのひと時を味わったのであった。

ここで、ヴェルレーヌの墓を紹介しておこう。その墓は、パリの西北十七区クリシー門のオノレ・ド・バルザック中学校の裏側に位置しているバティニョール墓地であって、その正門大通り第九区画のロトンドに面してある。背高平墓石型で両親と共に眠っている。墓は最近まで、同じ墓地の他区画に窮屈に押し込められていた。詩人の威光が、陽当たりの良い一等地に移葬させたのであろう。この墓地には、第三十一区画にシュルレアリストの詩人アンドレ・ブルドン、第七区画に作家のブレーズ・サンドラーズ、第六区画には異端の作家ジョセフ・ペラダンの墓がある。その墓は、肖像を色焼き付けにした小粒タイル寄せ張り平型なのだが、生前の奇矯を喧噪に語りかけてくる他に例を見ない墓である。ペラダンについては、澁澤龍彦の『悪魔のいる文学史』に紹介されているから、大方の読者もご存知だろう。

私は、パリ市教育委員会に不満を唱える者である。何もバティニョール墓地近くの中学校に、バルザックの名を与えずとも、なぜ、ペール・ラシェーズ墓地近くの中学校に『ゴリオ爺さん』の作家名を与えなかったのだろう。バルザックの読者なら、私の不満に異議を挟まないであろうと思う。

話がすっかり横道に逸れてしまったが、逸れたついでに、付記させてもらうと、私はパリへ出発する直前、福井の里小山の頂上に、内助の夫人と共に眠る土佐の偉大なる文人、清貧の人鹿持雅澄の奥津城に詣でた。大海を隔ててはいたが、ユーゴやバルザックと同時代の人であることに感慨なしとしない。

さて、『ゴリオ爺さん』の舞台である〝高等下宿屋ヴォーケル館〟は、デカルト通りを南へ、ヴァル・ド・グラース病院の方向に下るヌーヴ・サントジュヌヴィエーブ通り（現在のトゥルネフォール通り）の端に設定している。尋常ならざる父性愛の小説の冒頭に、パリのどんな界隈でもこれほど陰惨で、人に顧みられないところはないだろう（小西茂也訳）と、この街筋を描写している。しかし、私が実地検分した限りでは、時代の流れによるのであろう、また、道路が舗装されたことにもよるのか、庶民住宅街の印象であって、陰惨な感じは全く受けず安堵を覚えたのである。

私は、急坂のトゥルネフォール通りを下った附近の、あちこちの建物を見渡した。すると、パンテオンに向かい、通りの右側に、通りから十五メートル程ひっこんだところに、レンガ造りの三階建屋根裏部屋付き急勾配黒スレート葺き、幅約十五、六メートル程の屋敷を見つけた。通り面の鉄柵門が開いていたのを幸い、外庭の敷石を踏み玄関前まで進み、建物の全貌を眺めやったのであったが、ヴォーケル館の建物と外庭の描写と、実に符合しているではないか。

小説では四階建になっているにしても。玄関の上部の壁に、F&A DEBEAVE の大きな文字が浮き彫りに見えていて、学生寮の趣である。私は、部屋〳〵の高窓を見やりながら、ゴリオ爺さんの部屋、人間喜劇の諸篇に良かれ悪しかれ〈たゆたえども沈まず〉パリの荒波に乗り出さんとする学生ラスティニアック、医学生ピアンション、そして悪漢のヴォートランの部屋を特定してみたり、経営者ヴォーケル未亡人の、「東洋のお方、何か用事なの」、そう物言い顔に窓からこの私を見おろしている姿が想像されるのであった。

残念なことには、建物の礎石年が表示されてなく、いつ建てられたのか分からない。ゴリオ爺さんが極度の倹約のために、この下宿屋に転がり込んだのが一八一九年頃であり、『ゴリオ爺さん』が発表されたのは、一八三五年であるから、バルザックが、もしもこの館をモデルとしたなら、少くとも一八三〇年頃には建築されていなければならない。この点については全く確証が持てないのであるが、パリでは二百年を経た建造物でも当時のまま健在なのは普通であるから、その頃、既にこの館は存在していたと推測することは可能である。そのことより、外面からは裕福なる下宿人を対象にした、華麗な館に映り過ぎるのが議論の及ぶところであろう。

私は、トゥルネフォール通りを散策した二日後に、パッシー地区レイヌアール通りのパリ市立バルザック記念館を訪ねた。『従妹ベット』『従兄ポンス』などの後期傑作を生んだ隠家でもあったのだが、バルザックが、パリ市中を散策した、その折り〳〵のよきお伴であったトルコ石を散りばめた豪華な杖が、元気に展示されているのである。

（詩人堀口大學著作収集）

# かけがえのない物、リュート

松下　誠二

リュート。初めて耳にされる方がほとんどのことでしょう。琵琶によく似た形をし、十六世紀ヨーロッパの王侯貴族の間で流行した撥弦楽器です。その源は、ササン朝ペルシャにあるという程の古い歴史をもっています。

今から五年前、私は高知で初めてのリュートを手にすることになります。当時〝ぽえむ〟でのＢＧＭに古楽を使っていたことから、常連のお客様にリュートの演奏の誘いを受けました。しかし、忙しさを理由に断り続けました。古楽は、金属音がなく、音の強弱も少ないという特徴から、長時間聞き続けても疲れないため、選曲しただけだったのです。そんなある日、某ラジオ番組に彼を紹介したことで、運命の歯車は回り始めます。結局、私も彼も一緒に出演することになりました。そして、インタビューの進む中で彼は、「松下さんも、リュートを始めるんですよ」といい切ったのです。まさかそこで否定する訳にもいかず、笑いながら返事を待つ彼達の前で、しかも公衆の電波で「はい」というしかありませんでした。帰り道、「リュートがすぐ手に入る訳でもなし」とごねる私に、彼は「もう注文してある」と得意顔です。結局、完全に彼の術中に陥っただけでした。

そうして始まった私とリュートの出合い。リュートの弦は十三本と多く、最初は調弦に時間がかかりました。多忙な日々の中、練習時間を早朝に決め開店前の一時間、一人で取り組みます。しかし、調弦に三十分もかかり、演奏の練習は遅々として進みません。そうして、一年後初めて人前で演奏することになりました。ビオラダガンバとのコンソートで、曲はＪ・ダウランドの〝涙のパヴァーヌ〟。しかし、惨憺たる結果でした。もともと人前に出るのは苦手な方です。ましてや初めてのことでもあり、非常に緊張しました。もう二度と人前で演奏することもないだろうと内心ほっとしていました。

にもかかわらず、昨年二度目の機会に恵まれ、日本のリュートの第一人者である、つのだたかし氏のコンサートで一緒に演奏させていただきました。つのだ氏が高知を訪れるようになって三度目のことです。今まで、ＣＤ、コンサートをとおしてしか知ることのなかった彼を身近に感じることのできた一時でした。

始めたばかりの頃、やむを得ず早朝に一人で練習しました。しかし、今は開店前にリュートを弾く時、穏やかな自分に戻れます。いつの間にか、リュートは私の中でかけがえのない物の一つになってしまいました。そしてたった一人との出会いからこの楽器と出合えたこと、また、多くの人々と出会えたことを感謝しています。これからも、さまざまなものから発展する出会いを大切にしたいと思います。

（食品会社経営）

# 六十年来の友

葛目高風

往事茫々としてあまり年月は確かではありませんが、私と尺八の出合いは今を去る約六十年くらい前になります。それは近所に住んでいた石黒さんといわれる方が時折吹かれる笛の音が、子ども心にも何となく哀調を帯びた好ましいものに聞え、自分も吹いてみたいなと思ったのが最初です。その後祖母方の伯父の手作りの尺八を自己流で吹いたりしていましたが、本格的に稽古を始めたのは戦後を十五年程経過した頃です。

前年長女を出産した妻が産後の肥立ちが悪く、自宅で療養中で病床にあってイライラの毎日が続く時期でもあり、それこそ〝渇する者に水〟の譬えのように当時隔勤の生活であったので、





非番の日は終日裏山で吹き続ける程に尺八にのめり込みました。

それより一時中断した時期もありましたが、約三十年間続けたことになります。

さて尺八は素材にはプラスチックまたは木の物もありますが、多くは自然竹（真竹）を使用し、中を刳り抜いて一本の筒とし、前面には通常四個（まれに六個または八個）の、また裏面には一個の穴を穿ち、根もとの方を直角に切断してこの部分を管尻といいます。

また口元に当たる方は斜に削り取りこの部分を歌口といって角（つの）またはプラスチック製の一片を嵌め込んだ（嵌めない場合もある）誠に簡単な構造です。

俗に尺八は首振り三年と称されて難しい楽器の代表のようにいわれていますが、それは尺八が数個の手穴を有するのみの単純な構造でありながら、通常二音階（練習次第ではそれ以上）の音域をカバーするいわゆる作音楽器で、音律を合わすための指の開け方と専門的用語では浮（カリ）沈（メリ）と称する顎を突き出したり、引いたりの動作が他の楽器のように簡単でないからであって、音を出すだけなればさほど難しいものではなく、現に四歳の幼女が吹き鳴らした実例もあります。

尺八は持ち運びに便利で、いつでもどこでも一人でも多人数でも楽しめ、琴三絃との合奏はもとより、民謡、吟詠、歌謡曲そして広く洋楽の分野にまで活用されており、それらとの伴奏はこれまた無上の楽しみであり、その上運指の動作は老化防止に役立つのみならず、腹の底まで息を吸い込み、静かに吹き出す一連の動作は自ずと禅にも通じるともいわれ、尺八を吹かれることはストレス解消にも役立つものとお勧めします。

（琴古流尺八家）

# 中学時代からの思い出が

山本　康世

私の今までの人生（といっても、まだ二十四年そこそこですが）を振り返ると、音楽と共に成長してきたように感じられます。幼い頃の私は音楽が大好きで、父や母にいつもレコードをかけてもらっていたそうです。そして、幼稚園に入ってピアノを習い始めて、小学校・中学校と続けていました。

中学校に入学して友達に勧められ、吹奏楽部に入部しました。そしてその時、顧問の先生にクラリネットという楽器の担当を決められたのです。それが、クラリネットと初めての出合いでした。初めてクラリネットを吹いた時、音が出てとてもうれしかったことを覚えています。しかし、一つひとつの音を正確に出すことは難しく、毎日毎日、一生懸命に基礎練習をしていました。中学・高校時代は練習が大好きで、授業が終わるとすぐに練習に行っていた記憶があります。

それから十二年、高校を卒業後看護学校を経て、現在高知市民病院で看護婦として働きながら、鏡野吹奏楽団に所属しています。楽団では、一年を通じてコンサートやコンクール、いろいろな施設への慰問演奏などの行事が多く、ほとんど毎月何らかの催しに出て行きます。週二回、水・日曜日が練習日ですが、本番が近くなると、週三回になります。看護婦をしながらの私にとってはちょっときついですが、頑張って土佐山田まで通っています。

一人でクラリネットを吹いてもあまり楽しくはありませんが、沢山の曲を仲間と一緒に合奏するのは、とても楽しいものです。でも、楽しいばかりではありません。曲によっては難しいものもあるので、指がうまくまわらないところは、集中的に個人練習をします。みんなと音やリズムを合わしながら表現をし、難しい部分もあるからこそ、楽しいのだと思っています。

そして私は、その楽しさが私達の演奏を聞いて下さる方々に伝われば…といつも願っています。

私の目標は、「人に感動を与える音楽」です。これはとても難しく、すぐにはっきりと、答えがでるものではありません。これから先、何かの縁で私達の演奏を聞いて下さる方がいるかもしれませんが、私達の演奏で何か伝わるものがあれば、とてもうれしく思います。

（高知市民病院）

私の昭和⑩

# 思い、いろいろ

國澤　秀雄

私は一九二六年四月に生まれた。大正十五年である。その年の暮れに大正天皇がなくなり、昭和が始まった。

私達の小学校一年時代は、色つきの「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」の国定教科書で、上級生から譲り受けが出来なくて困ったものだ。

一九四五年繰り上げ徴兵検査で、五尺二寸、十四貫五百の私でも、不思議に甲種合格であった。何でか徴兵にかからず（日本発送電勤務であったためか？）、八月十五日を迎えた。

一九四五年七月四日未明、高知空襲、佐川給電所から東の空に花火のような空襲の夜景を見て、午前四時自転車で高知へ一人で出発。日下で避難民と会い、高知の五丁目で封鎖されたが身分証明書で突破、焼け跡の中を江ノ口変電所まで行って江ノ口保線区の人たちに北を走っている送電線の復旧を頼み、やっと送電可能になったが、配電側の係長が「本日の受電はほとんどゼロでしょう」との返事だった。帰りにノーパンの自転車に焼夷弾の焼け殻をくくりつけて佐川まで帰った。

その年の八月十四日夜勤、東京中央給電所から「明日正午、玉音放送があるが、その後負荷の変動があると思われるので十分対応できるように」との連絡があり、何となく敗戦の予感がした。

一九四五年十二月、職場の人たちに勧められて、労働組合結成に取り組み、翌四六年一月十五日、佐川に日発高知の全職場から代表を集めて日本発送電高知地区電力所従業員組合を結成した。その年の暮れには電産協の闘争を組織し、五〇年八月二十五日、いわれなきレッドパージにかかって会社を追われた。

一九七八年五月に、甫喜ヶ峰森林公園で全国植樹祭が行われ、二十日に天皇が来高した。高知市の宿舎は城西館であった。二十一日に甫喜ヶ峰へ行って午後宿舎へ帰って来た。私はそれを知らず午後自宅へ帰るため、小津町から八反町（当時は八反町にいた）への道を歩いて駅前からの通りを渡ろうとすると、日の丸の小旗をもった人がいっぱいで道路が渡れない。そこで仕方なくちょっと東の歩道橋まで行ってそこを渡ろうとかけ上った。立ち番をしていた警官がそれを見つけて私を止めようとしたが、その時、「万歳、万歳」という声が東の方からおこって天皇の車が近づいた。警官は歩道橋に上るのをやめ直立不動の姿勢で歩道橋の下に立った。私が歩道橋の中央に立った頃、天皇旗をつけた車が下を通り過ぎて、二丁目まで行って電車通りへ出、バックして城西館に帰ったようである。私はそのまま歩道橋を渡って家に帰った。土曜日だったと思う。その時、何となく「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」という言葉を思い出した。

一九八八年十月十三日、ニュースで天皇下血の報を聞きながら、このまま天皇の死を漫然と迎えれば、天皇の戦争責任は不問になると考え、二五〇人の人々が集まり、「天皇の戦争責任を追及する高知の会」を結成し、昭和を考える上で決してうやむやにすることのできない、天皇の戦争責任問題を取り上げてきた。

やったことはどんなことか、機関紙を発行し、大型ビデオで天皇の戦争責任にかかわる記録映画を上映し、さらに本島長崎市長に激励の手紙を送ったりした。

年を越して八九年一月七日、遂に昭和天皇は死去し、時代は平成になった。

昭和天皇の戦争責任には、大きくは次の二つがある。一つは満州事変勃発の引き金となった、一九三一年九月十八日の柳条湖（中国瀋陽北郊）事件について、この満鉄爆破の



加害者である関東軍に対し、「さきに満州に於いて事変の勃発するや、自衛の必要上関東軍の将兵は果断神速、寡よく衆を制し速やかに之を芟討（さんとう）せり。（中略）朕よくその忠烈を嘉（よみ）す」という勅語を与えてこれを激励したことであり、また一九三七年七月七日、日本は盧溝橋事件をきっかけに中国への全面侵略戦争を開始した。天皇は、この中国への侵略戦争開始後初めての議会の開院式（一九三七年九月四日）で、中国に戦争の責任をおしつけるとともに、議会に軍事費増の審議を命じる「勅語」を発した。「中華民国よく帝国の真意を解せず、みだりに事を構へ遂に今次の事変を見るに至る。朕之を憾とす。（中略）朕は国務大臣に命じて特に時局に関し緊急なる追加予算案及び法律案を帝国議会に提出せしむ。卿等（けいら）よく朕が意を体し和衷協賛の任を竭（つく）さんことを努めよ」

一九四一年十二月八日、日本は大平洋戦争を開始した。天皇は開戦の「詔書」を発し次のように述べている。

「朕ここに米国及び英国に対して戦を宣す。朕が陸海将兵は全力を奮て交戦に従事し、朕が百僚有司は励精職務を奉行し、朕が衆庶は各々（おのおの）其の本分を尽くし、億兆一心国家の総力を挙げて征戦の目的を達成するに遺算（いさん）なからんことを期せよ。（中略）

東亜安定に関する帝国積年の努力は、悉く水泡に帰し、帝国の存立また正に危殆に瀕せり、事すでに此に至る。帝国は今や、自存自衛の為、蹶然起って一切の障礙を破砕する外なきなり。

皇祖皇宗の神霊上に在り、朕は汝有衆の忠誠勇武に信倚（しんい）し、祖宗の遺業を恢弘（かいこう）し、速やかに禍根を芟除（せんじょ）して、東亜永遠の平和を確立し、以て帝国の光栄を保全せんことを期す」

天皇の戦争責任の大きなその二は、一九四五年二月十四日、元首相の近衛文麿が天皇に敗戦の必至を説き、早期和平を上奏したのに対し、天皇は国体護持を第一とし、そのためになによりも戦果をあげることに固執し、「侍従長の回想」によると天皇は次のように言っている。

「もう一度、戦果をあげてからでないと、なかなか話はむつかしいと思う」

こうして四五年三月十日の東京大空襲による被害、四月から六月にかけての米軍の沖縄本島への上陸による沖縄県民と軍人二十数万人の犠牲など日本国民の被害は急増する。

四五年七月二十六日ポツダム宣言が発表され、八月六日に広島、九日には長崎に原爆が投下された。こうして八月十五日ついに天皇制政府はポツダム宣言を受諾し、連合国に対し無条件降伏した。

以上が昭和天皇の戦争責任を追及する私たちの根拠である。そうしてこの責任には、昭和天皇の直接の責任と、それを支えてきた天皇制そのものの責任があると思う。昭和天皇は死去した。誰が死んでも死というものは喜ぶべきものではない。しかし、昭和天皇死去後の様々な皇室行事（天皇家の行事であるべきものを国の行事にしたりして）を通じての天皇制イデオロギーの定着をねらったもくろみには、抗議の意志を明らかにしたところである。

特に天皇個人の思い出を美化することによって、昭和が天皇の名によって戦われた侵略戦争の時代だったという歴史の事実を、国民が忘れるような流れを作ってはいけない。

一九八九年一月七日以降、「追及する会」の活動も、日に日に薄くなって、最近はもう目に見えなくなった。国民主権、天皇制復権反対、復古の風潮に歯止めをかけるためにも、こんな会が高知にも存在したことに意義があったのではなかろうか。

（天皇の戦争責任を追及する高知の会代表）

— 完 —


## 市民フロアをご利用下さい

◆広さ・内装
96㎡、壁面布クロス張り、スポットライト完備

◆使用時間
㈠展示　午前九時～午後六時
㈡会議　午前九時～午後九時

◆使用料
㈠展示　一日一一、〇〇〇円
一週間七〇、〇〇〇円
㈡会議　午前九時～正午　四、〇〇〇円
午後一時～五時　五、〇〇〇円
午後五時～九時　五、〇〇〇円

◆所在地
高知市はりまや町一－五－一
デンテツターミナルビル五階

◆お申し込み
本町五－二－三　自治会館二階
㈶高知市文化振興事業団
（電話　七三－四三六五）

## 流路訪作(一)

# 柚子の興産

山岡　浩

土砂降りのなか、香長の野から山田堰、杉田・吉野・永瀬三ダムを経て物部村大栃に着く。標高二二六メートル。

物部川、夜来の雨にダムゲートの喫水を深く沈めつつある。

ここに出会う里人は、往年の渓流を惜しみながら、下流域の潤いを讃え、そこに一言「この雨で下の方にことが無ければよいがのお」

一瞬痺れる思いでこの言葉を受けとめた。下流思いの心が流域真如の像に映り、深い感動を覚える。

そこに、この村の育む柚子一品を訪ねていた。

土佐の柑橘分布を一瞥するに、海岸から内陸部にわたり、等温線が東西に走る。

この年平均等温線は、柑橘類の住み分け分岐線ともなっている。

耐熱性ポンカンは、セ氏一七度の海岸線上の甲浦、浦ノ内、清水がその北限域をなす。暖帯性文旦は、セ氏一六・五度までの海岸に近い土佐市、須崎、宿毛の山懐が主産地。温州蜜柑は、セ氏一五・五度までの中間域に広域分布し、産地銘柄として山北がある。

柚子は、セ氏一四度までの上流域が適地で、北川、馬路、安芸、物部、大豊、土佐山、吾北、吾川、池川、中村、西土佐、東津野、梼原など。

いずれも、かつては五穀を耕し楮の紙漉き、炭焼き、養蚕それに、家毎に牛を繋ぎ鶏小舎を構えるなど、山峡ならではの豊かな賑わいがあった。

どの家にも、一～二本の柚子があって、屋敷の生け垣やそのめぐらに自然な育ちを見せていた。

この実生育ちの柚子は、成木に十年とかかるが、木々に個性があって、その熟れる黄金の味を誇り家木として大切にしてきた。

柚子の根は直根で、幹は一本調子に天に向かう。枝に刺があって木登りをゆるさず、常時竹バサミを木に持たせかけていた。

ウルメの酢漬、五目寿司、鯖の姿寿司など、花柚子から青玉、熟れ朽ちるまでの長い季節にわたり、わが釜屋、食卓に田舎料理の粋な風情を演出、暮らしに気品を醸し、田舎の食文化に大きく貢献してきた。

柚子の世界は、専ら自家嗜好に限られ、めったに外に出ることなく、明治、大正、昭和の農産品の発展期にあって、依然自給自足食品の域を過してきた。

世は飽食、グルメ時代を迎えた。ようやくにして草深く育つ伝統の自然食品が見直され、和食奥儀の大衆化のなかに、柚子の持ち味が賞味され、新食品時代の貴重な商品生産品

### 第4回高知出版学術賞推薦受け付け

その年に発行された最も優れた学術出版物を顕彰する「高知出版学術賞」「高知県書店商業組合協賛」の推薦を受け付けています。

推薦の対象は、①高知県内に在住する人の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述で、②昨年中に発行された単行本等です。

自薦・他薦を問いません。一月三十一日(月)までに所定の推薦書に必要事項を記入の上、該当図書二部を添え、審査委員会までお送り下さい。

詳しくは文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。

### 第10回高知市都市美デザイン賞推薦募集

街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

〈対象〉平成5年1月1日から平成5年12月31日までの間に高知市内で完工した建築物や建造物。自薦、他薦は問いません。

〈推薦〉はがきに①推薦建築物の名称、所在地、完成時期②推薦理由③推薦者の住所、氏名、年令、職業、電話番号を記入し、推薦して下さい。一人何件でも推薦できますが、はがき一通につき推薦物件は一件とします。推薦物件は選考委員会で選考し、特賞1点・入賞2点を決定します。

〈締切〉平成6年1月31日(月)

〈送り先・問い合わせ先〉高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係



目として、その栽培天地が闊然と開けた。

物部村根木屋集落に、風囲いをも兼ねる柚子の群育があり、齢百年にしていまに悠々熟果を結ぶ。

黄金成る木々に、丸太で足場を作りそこに梯子が掛かる。往年の柚子採る風情があって懐かしい。

物部村の柚子栽培の端緒は、昭和三十年頃からの温州蜜柑。作り上げた果色は上々、だが何としても甘味が乗らない。「酸いものならいっそ柚子でいこう」という、この判断が決断となる。

三十五年頃からぼつぼつ、柚子接木苗の栽植が始まる。仕入苗のウイルス病が最初の試練で、健全な母樹選定とその穂木による接木指導があって、先ず自らの苗仕立てに熟達した。

樹形は、主枝、亜主枝を切り返しで樹冠を作り、テープ誘引の開張で結果枝群が育つ。表年は切り返し、裏年は間引き剪定が主体で側枝の短縮更新をはかる。段畑の地の利を矮化栽培に生かし見事な結実を産む。

柚子の物部村、その栽培面積一〇〇ヘクタールに達し、豊かな段畑樹園の峰々が湖上に浮上している。

樹園地は、かつての芋畑、桑畑、それに若い植林など元畑地分が七〇%、あと三〇%は水田の転作など。栽培農家は二百戸の規模。

柚子の出荷は、青玉、黄玉の青果用と柚子酢用への仕向けとなる。

青玉は八～九月の頃で、近年青玉嗜好が進み若果にして高級果実となり需要を高め人気がある。

早採りの青玉は、摘果性効果ともなり、樹勢回復、隔年結果の防止に役立つなど、栽培に安定性を増幅している。

出荷量の主体は、やはり黄玉にあって十月に始まる。十一月下旬までに収穫、一旦高温処理し予冷庫に貯蔵して、翌年三月までの出荷となる。

だが、出荷の最盛期は十二月二十二日の冬至、この時点で九〇%の出荷となって年末に進む。

黄玉の出荷はA・Bの規格、Aクラス秀品は品位備わる高級柑橘。B規格には冬至用、漬物用があって、奥深い需要に妙味を生かしている。

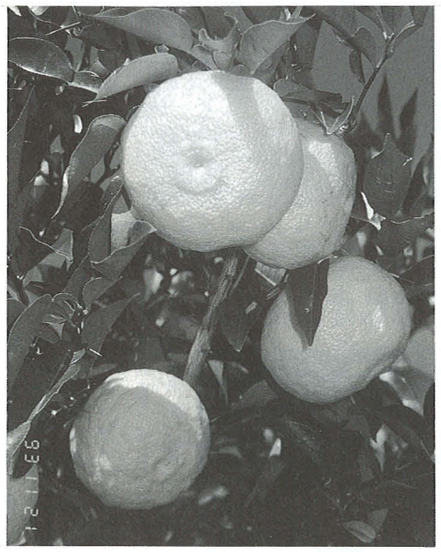
冬至用、漬物用の規格創設があって、これが玉出し率向上ともなり、潤いを増している。

黄玉の青果用以外は、果汁加工用となる。

農協柚子選果場に、新型自動選果機が据わり、予冷庫とともに果汁搾汁ラインの併設があって、出来秋の一斉処理となる。

搾り粕から果皮が選別され、果皮のもつ芳香性精油の残効性が、広い用途に生かされる。

果汁は、一部瓶詰とし多くはポリ容器詰で出荷、冷凍保管して、ポン酢醤油、菓子など食品企業原料。



柚子の玉

果皮は、菓子、佃煮、味噌原料となる。

地元での柚子加工に、婦人グループの柚子味噌、柚子ドリンク、別府峡の原酢瓶詰があって、故郷の味がさらに育つ。

全国の柚子は、高知が突出産地となってこれに徳島が次ぎ、大分、宮崎、愛媛と続く。

本県の青果用玉出し出荷、その四八%を担う物部村柚子は、全国の代表主産地である。その躍進に驚く。

襲い来る過疎、その深刻に辿る過疎化の長い過程は、山峡の沃地に伝承する貴重な特産品、営々と築き挙げてきた農耕文化の悉くに迫り来たものであった。

品目荒廃の現象が、地域風土砂漠化への警鐘乱打となった。地域品目創造が、万民の希いとなって山里に谺した。

地域空間にその活眼を得るまでには、数限りない試行錯誤の連続。だが滅入ることのない根気、自然と人との調和が、勿然としてその道の創造となった。

村の将来像は「奥物部の風土に根ざす、若者に魅力ある産業を育てる」を掲げている。

宣なるかな、柚子それに生姜など選りすぐりた村品目、逞しい専業農家群を形成、その中核に親子専業農家像生誕の輪が育つ。

暇する際、里人は「過疎がその速度を落とした訳ではない。柚子の定着体験を教訓に、むしろこれからです」と。この一言に重みがあり、敬服する。

(元高知県農業協同組合中央会参事)

タイ・ワークキャンプに参加して（上）

# 未知の国へ

可知　文恵

私は外国の風土や文化・民族性に興味があり、旅行会社のツアーで数回外国旅行をした。しかし、単なる観光には満足出来ず、何らかの形でその国の人たちと交流を持ちたいと思った。そこで、関係機関に当たってみたが、「帯に短し、たすきに長し」で、私にぴったりとくるものは、なかなかない。そんな矢先、高知新聞で「タイでワークキャンプを」の記事を読んだ。

「春休みを利用して、タイでワークキャンプをしませんか。草の根の日・タイ交流を進めている在日タイ人で、国際経済学者のクントン・インタラタイ京都精華大学教授が参加者を募集している。キャンプは三月二十日～三十一日まで。タイのチェンマイ市のトゥンルアントン村で民家に宿泊しながら、小学校建設を手伝う。夜は歌や踊り、ゲームなどを楽しみながら、村人たちと交流、寺院観光や軽登山なども計画している。

ワークキャンプは七年前から始まり、毎回、年齢や職業のさまざまな日本人が参加。両国の親善を深めている。クントン教授は〝日本とは違ったタイの文化に触れて、新たな価値感を見いだしてほしい〟と話している」

私はこの呼びかけ記事や、その他の新聞記事で、クントン先生のお人柄や、日・タイ交流の意義とその内容に共感を覚え、早速に参加申し込みをした。費用は飛行機代、タイでの滞在費、学校建設のための費用など含めて二十万円。

私が未知の国タイへの旅に思いを馳せながら準備をしていると、それを聞きつけた友人らが「可知さんを止めないかん」と騒ぎ出した。外国はこわい。後進国はなおさらというわけだ。そんな人々の心配をよそに私は出発した。一九九一年三月に参加して以来、もう五回。

友人たちは呆れ顔で「タイはそんなにえい所かね」「えらいねぇ。なかなか出来ることではない」「あんたは勇気があるねぇ」「国際貢献ご苦労さまです」などという。私がしていることは、そんなに偉いことでもないし、勇気がいる程のことでもない。私は気楽に、楽しんで参加しているに過ぎない。

学校建設の手伝いにしても、私に出来るかどうか心配したが、バケツリレーで砂運びをしたり、自分に持てるだけのレンガを運ぶ。日本にいた時は「そんなことようせん」と思ったけれど、いざ、タイでやってみると楽しい。

このワークキャンプでは「誰にでも出来る。マイペースで」なのだ。外国の人は仕事をしても、勉強をしても遊びながら楽しく人生を送っているという感じがする。日本人のように、みんな一様に過労死するような働き方はしないようだ。

水かけ祭り（高知のドロンコ祭りに似る）

ワークキャンプ中に周辺の学校の先生が集まって来て研修会が持たれる。クントン先生の講演があり、その時私たちも参加する。四回目の時のことだ。タイの先生から「あなたはタイへ来る前にタイについてどう思っていたか。そして今、タイへ来てどのように考えるようになったか」との質問を受けた。タイの先生方を前にして卒直に答えるは難しい。

参加者中の最高齢であり、四回も参加しているからであろう。クントン先生が「可知さん、どうですか」と指名された。一瞬、タイへ来るのを止めようとした人々のことが私の頭を過った。

「タイへ来る前は日本よりも後進国で、経済力も低く、政情不安定で食糧が不足していると考えていた。実際に来てみると、予想に反して平和で豊かな国だ。日本が敗戦後に急成長を始めた頃によく似ていて、近い将来、素晴らしい国に発展するという息吹を感ずる」

突然のことだったが、これが私の実感だった。

クントン先生は私が日本で写真展や話などをして、タイの事情を知らせる活動をしていることをつけ加えて通訳されたそうである。

（タイ・ワークキャンプ協力員）



土佐の野鳥㈣

# ジョウビタキ

山下　隆文

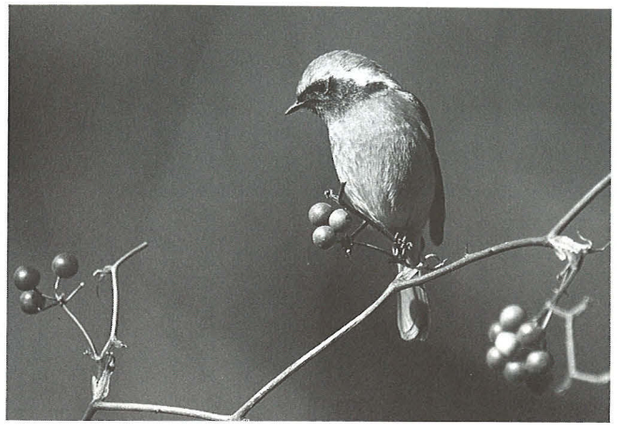
全長約一四センチ、冬鳥として全国に渡来する。高知県内でも普通に見ることができる。

このジョウビタキの仲間には、夏鳥のオオルリ、キビタキ、ノビタキ、コマドリ、留鳥のルリビタキ、キビタキなど多くの種類がいる。

私には、このヒタキの仲間の思い出が二つある。

○小鳥の思い出

まだ子どもの頃、山で、〝コボテ〟（鳥を捕る罠の一種）で鳥を捕ったり、トリモチでメジロを捕ったり、〝ブンヤ〟で鳥を落としたりしてよく遊んでいた。小学校の三年か四年の頃だと思うが、家の裏の八幡様の森で〝ブンヤ〟をつかって鳥を撃っていたところ、当たることはほとんどなかったが、珍しく小鳥に命中した。その弾に当たって落ちた鳥を拾ったところ、背中はブルー、腹は白色で今まで見たことのない美しい小鳥だった。「なぜこんな綺麗な鳥を殺してしまったんだろう」と自責の念で数日間落ち込んでいたことを、今でもはっきりと覚えている。



それからは、〝ブンヤ〟で鳥を撃つことはもちろん、トリモチで捕ることも、〝コボテ〟で捕ることも一切止めてしまった。このことが、私が野鳥に興味を持った最初の出来事だった。

今思うと、その小鳥は、羽色からコルリかオオルリではなかったかと思う。

○ジョウビタキの思い出

私の友人のO氏は、大の野鳥好きである。

ある年の冬のこと、O氏の家の庭に、毎年のことだがジョウビタキがやってきた。庭にあるピラカンサの実を食べにやってくるのである。そこで、野鳥好きのO氏は考えた。なんとか、自分の手から餌を直接与えることはできないものかと。

手の上に餌を置き、試してはみたが、そこは野鳥である。一定の距離までは近寄って来るが、それ以上は、近付いてくれない。

いろいろと試行錯誤のうえ、餌箱に餌を入れ自分は離れ、まず、その餌箱を覚えさせた。これには約一週間かかったが、必ずこの餌箱から餌をとるようになった。

その次にO氏は、その餌箱を少しずつ自分に近付けていったのである。その結果、手の上の餌箱から捕るようになり、最後にはとうとう餌箱なしで、手のひらから直接餌をとったのである。

この間約一ヵ月、もちろん誰でもできるものではない。O氏の野鳥に対する深い愛情と根気が、人間と野鳥との信頼関係を生んだのである。

O氏から「山下君もやってみや」といわれ、手のひらに餌を置き待っていると、頭上の木にやってきたジョウビタキのピーコ（O氏はこう呼んでいる）は、何かいつもと違う雰囲気に様子をうかがっている。

ピーコは、「この人間、近付いて大丈夫かな？」と考えていたに違いない。私はその時「決して危険人物じゃないよ」と何度も心の中で話しかけた。何か受験の発表を待っているような、なんともいえない緊張感でいっぱいだった。数分後、一瞬のことだったが、確かに私の手から、ピーコは、餌をとってくれたのである。受験に合格したのだ。

このときの感動は、今でも忘れることができない。

野鳥を愛し、自然に対し謙虚な気持ちさえ持っていれば、人間と野生との壁が必ず取り払われ、共存していくことはできるのだと思った。

この出来事は、私にそんなことを教えてくれた。

（完）

（写真家）

# 私的、日常的インタビューのすすめ

細川　葉子

アナウンサーの仕事は大きく分けると話すことと聞くこと。ここでは「聞く」方を取り上げたいと思います。

聞く仕事、つまりインタビューも三つに分けられます。

一つは、質問も答えも予め決まっていて、自然なやりとりが出来れば良いというもの。二つ目は、答えにほしいものがあって、それを引き出すために質問をあれこれ工夫するというもの。例えば、高知では外食をする人が多いという内容なら、街頭に立って外食の多い人の話がとれるまで何人も道行く人をつかまえてはマイクを向ける、といった類のインタビューです。三つ目はどんな答えが出て来るかわからないケース。最もインタビューの醍醐味を感じるのはこの三つ目です。

私の担当するラジオ番組に「細川葉子のブランチタイム」というのがあります。土曜日の朝九時から三時間の生放送で、様々なジャンルのゲストをスタジオに招き、インタビューをするものです。やりとりをする時間は正味一時間にもなりますので、テレビや新聞などの限られた時間・紙面では出せない裏話や人柄まで伝わってきます。

自然豊かな高知というけれど、あるがままの森の姿は県土の八〇％以上を占める山々にはほとんどなく、今や各地の神社の鎮守の杜に残るのみになっている。その杜すら都市化の開発などで削られる一方であること。

無農薬・有機栽培が、売れるためのキャッチコピーになってしまった野菜。あえてこれをうたい文句にしなくても、低農薬と土壌改良でおいしくて安全な野菜作りに取り組んでいる農家が多いこと。さらには、農家の嫁不足がいわれるけれど、子育てしながら仕事を続けるには、自分のペースで調整ができ、ストレスに悩まされず自然の中で働ける農業はうってつけであること。

古紙の値段が外国からの安い輸入品などの影響で下がり、古紙回収業は大変。チリ紙交換の車も回って来ない。でも本当に厄介なのは集めた古紙を仕分ける手間と人件費、新聞・チラシ・雑誌などをちゃんと種類ごと分けて出すお客さんなら喜んで飛んで行く。

路面電車で今や観光の目玉にもなっている外国電車やレトロ電車、中には出入口が吹きさらしのものが…お客さんにとっては風情があって良い。でも運転士にとっては、大雨の日はびしょ濡れ、冬は震えでガタガタ、辛い。

これら毎週はっとさせられる話、なるほどと頷いてしまう話が飛び出してきます。

人、一人生きていくことはそれだけでドラマです。仕事の話はもちろん、趣味や生き方などどれだけ聞いても飽き足りない。

私はたまたま職業を通して聞くことの楽しさを実感している訳ですが、聞くというのは特殊技能でも何でもない。一般的に聞きたいと思った時聞けない何かがあるとすれば、それは人にものを根掘り葉掘り聞くものでない、といった類の日本的美徳感から来るものでしょう。でもこんな奥ゆかしさが国際的には通用しないことを、今私たちは思い知らされています。黙っていれば思いは伝わらない。逆に相手にものを尋ねることはその人に関心を持っている証になります。自分の得意とする分野や大切にしていることを尋ねられて、いやだと思う人がどこにいるでしょうか。

もしためらいが少しでもあるなら、「こんなこと聞いたら失礼かもしれませんが…」、「立ち入ったことをお聞きしますが…」、「不勉強で分からないんですが…」を頭につければ言いやすくなります。

で、いい話が聞けた時は、「なるほどね。やっぱり聞いて良かった」の一言をお忘れなく。

思い切って聞いてみて下さい。知識の世界を広めてくれるだけでなく、人間関係が広がるという素敵なおまけもきっとついてきますよ。

（高知放送アナウンサー）



# 歌めぐりの旅風景

松田　雅子

「檸檬」の風景に出てくる赤い快速電車

ある日、友人から絵はがきが届いた。文字がはずんでいることから、かなり興奮していることが分かる。

それによると、彼女は東京お茶の水にある「レモン」という画材屋さんに行ってきたらしい……。

お茶の水・れもん、と聞くと、思い当たることがあった……。さだまさしの「檸檬（れもん）」という歌である。

その後、帰高した彼女は私に、

「スペシャル土産があるから、楽しみにしてくれ」

と、電話をくれた。

ある日曜の昼下がり、早速彼女は私の部屋を訪れ、うれしそうに一冊のアルバムを渡してくれた。

一見何の変哲もない、カメラ屋でよく見掛ける小さなアルバム……。

「絶対最高に喜ぶ！早う開けて！」

という彼女を見ながら疑問が募る。

表紙をめくった……。

お茶の水の風景が写っていた。その写真のコメントの部分には「あのひ……」と文字が書き込まれている。次の写真は湯島聖堂の階段。コメントは「湯島聖堂の白い石の階段に腰掛けて……」である。

次のページには予想通り、ひじり橋、そして赤い快速電車が勝ち誇ったように写っていた。

「負けた！」

と、大笑いする私……。満足そうに頷く彼女……。その写真は、明らかにさだまさしの「檸檬」の歌に登場する風景であった。

あの日　湯島聖堂の白い
石の階段に腰掛けて
君は　ひだまりの中にむすんだ
檸檬細い手でかざす
それを　暫く見つめた後で
きれいねって言った後でかじる
指の隙間から青い空に
カナリア色の風が舞う
食べかけのレモン
ひじり橋から放る
快速電車の赤い色がそれと擦れ違う
河面に波紋の広がり数えた後
小さな溜息混じりに振り返り
捨て去る時にはこうしてできるだけ
遠くへ投げ上げるものよ

私の大好きなこの歌……。

いつもイメージだけで聞いていたものが、まるで自分の思い出の風景のようにグッと私に近付いてくれたように思えた。

本当に、心からうれしいお土産だった……。きっと彼女のことだから、私を喜ばそうと、赤の快速電車が来るまで、カメラを構えて待機してくれたのだろう……。

「あー、こんな旅の楽しみ方もあるんだ」

と、つくづく感心してしまった。

思えば、芭蕉や山頭火の歩いた道を辿る人や、万葉集を訪ねる旅に出る人……、他にも、川端康成のトンネルを抜けてみる人……、宮沢賢二の「シタノ畑ニイマス」の伝言に会いに行く人……など、旅の目的はさまざまである。

さだまさしの歌の世界には、日本の風景がよく似合う。

タイトル「安曇野」や、「長崎」といった土地の名前がよく出てくるし、「蛍祭り」や「精霊流し」などといった、伝統行事もテーマになっている。

「飛梅」では、太宰府天満宮の様子が絵のように説明されており、実際にそこを訪れた時の感動を深めてくれた。

純粋文学の世界を漂うように、最近彼の歌の風景をさまよってみたくなっている……。

二十代の頃は、やたらと異国に憧れの気持ちを抱いたものだが、最近彼の歌に出合って、たまらなく日本が好きになってきた。

この友人と同じように、彼の選んだ風景をアルバムにまとめてみるのも楽しそうだ。

彼の歌を聴く度に、その旅の思い出を鮮やかに蘇らせることができるのもありがたい。

「今度の休みはどこへ行こう」

夫がそうつぶやいた……。

ガイドブックの代わりに、彼のアルバムをそっと開いてみた……。

（国際デザインカレッジ教員）

聞く

# カイツリ

## 土佐の小正月行事

土佐の山間部を中心に伝わってきた「カイツリ」、今はほとんどなくなりかけているが、この珍しい小正月行事について岩井信子氏（民俗・作法研究家）による「祈りの風景―土佐の正月行事」（講座・シリーズ「現代を読む」当事業団主催）から紹介してみたい。

◇

旧暦一月十四日、子ども達は学校から帰るとカユ箸というものを作る。所によって使う木は異なるが、樫の木などがよく使われる。皮つきの枝のままのごつごつした箸、これを作るのに木に登って切り落とす役は男の上級生、落ちた枝を削ぐのは女の子とか三、四年生、一、二年生なら出来あがった箸をユズリ葉と一緒にしてワラで巻く。こうしてそれぞれの分担でカユ箸が仕上がる。

夜が来ると、夕飯を食べた子ども達は集落の広場に集まって先ず変装をする。新しい例では、神祭の出店で買ってきたお面を付けたり、以前のことなら手拭いでほうかぶりをし、着ている「そうた」や「半纏」は裏返しにして足に通したりし、いよいよ誰か分からないようになる。

なぜ変装か。面とは人間が神に化身する時のものであり、村の娘でも変装して月明かりの下に立つと神になる。

その晩、地域の家々では、「カイツリ」がやって来るのを心待ちしている。子ども達は「トントン」と戸を叩くと、持ってきたカユ箸を盆ごと縁側に置いて息を殺して身を隠す。家の者は盆を持って部屋に入り、カユ箸をもらうと盆に餅を入れ、同じ所に置く。家の人の姿が消えると、子どもたちは代わりに餅をもらう。この餅は「カイツリ」へのお供物、神への供物。こうして一軒一軒を回っていく。

このカユ箸をどうするか。家々では「十五日ガユ」を炊き、これを田や畑、そして栗、柿、ミカンなどに供えていく。この時、「カイツリ」の持って来たカユ箸を使ってお供えをするという、大事な道具となる。

子ども達は、もらった餅をあくる日みんなで食べる。つまり共食をするが、これを食べるとその年は病気をしないと言い伝えられている。

子ども達は、他の土地にある「なまはげ」が正月神であるように、土佐においては来る年の幸せを運んでくる神そのものである。

子ども達は餅を家々でもらう（大方町）

このように、子ども達を神と見たてる行事は一年の中でも何回かある。

十月の亥の子の日、子ども達はワラ束を持ち、家々を回ってはそこの地面を叩いていく。これを「亥の子づき」といって、土地の神をはやすものと縁起がられる。この時も子ども達は亥の子の餅というのを家々の者からもらう。

また、中秋の名月の夜は、地域の子ども達はどこの作物をとってもよいとされる。この日を「イモ名月」ともいうので、イモを主食としていた頃からの風習であろうか。

これらは、地域の作物が全て子ども達へのお供物という考え方だ。

年齢の異なる地域の子ども達みんなは、このような素晴らしい民俗行事の中で見事に育まれていく。これは、現在社会の中でいま一番求められている大切な教育理念といえないだろうか。

正月には新年の幸せをもたらす神が来る。

土佐ではこの神が観念的なものではなく実体である。それは、未来を担う子ども達であり、青年であり、水であり、土地であり、自然である。

（編集部）

第９回高知の映像コンテスト特選

高知を撮る

# 柳田遺跡　森田　清一

## 足りない……

風俗歳時記

いまひとつ何かがたりない。若手の落語や講談などを聞きながら、そう思うときがある。上等の芸域にあることを認めながらも、やはり不満がのこる。

テレビのお笑い番組になると、もうどうしようもない。こういう笑いは本来軽薄なものかも知れないが、この頃それが一層軽薄なものになっていく。これでもか、これでもかと、無理やり笑いを強要するやり方は、逆に途中でしらけて笑えなくなってしまう。

芸は、つくられてこそ芸になる。だが磨き抜かれた芸は、その作為が消し去られるまでに高められたものをいうのだ。つくられたことが見え見えでは、視聴するものを納得させる芸にならない。至芸といえる芸にふれることが少なくなった。

全国チェーンのハンバーガー・ショップで、チーズバーガーを注文すると、北海道から沖縄まで、同じ厚さのピクルスの挟まった、同じ味のチーズバーガーと「またどうぞ」というあかるい声がもどってくる。わるくないけれども、何かが足りないというあれである。

明るい笑顔の応対はあっても、人間がやっている自動販売機と同じでないかと思われる。

販売のマニュアルを超すものが必要だ。それを超さないと、売り手と買い手の交流は生まれない。

ハンバーガー・ショップだけでなく、このころどの店もこうした交流が希薄になっているのではないか。

大阪人は商（あきない）のこころを知っているという。なるほどと思ったのは、理髪店に行ってのこと、「いらっしゃい」とか「いらっしゃいませ」というのは、どこも同じである。しかし理髪が終わり、金を払って後の、客への言葉がちがう。

高知だと、もう帰ってもらって結構だとも聞こえる「ありがとうございました」であるが、大阪だと「おかけやす」という。

このちがいが大きいように思う。

（普）

## 「高知ギターコンサートグループ」

### クラシックギターに魅せられて

沢田　卓志

私達のグループは、一九八九年二月に結成されました。それまで、もう十年近く高知県人による本格的ギターコンサートは催されていなかったのですが、その当時、エリザベト音大二年在学中の松居孝行君がギタリストとして活動を始めたのを契機に、かつてサロンコンサートをしたり、お互いに演奏の批評をし合っていたグループのメンバーも加わって、県民にギター音楽を理解して頂き、クラシックギター音楽の普及と愛好家（特に若い世代の）を一人でも増やすべく、毎年八～九月に演奏会を行っています。

ギターの可能性を探るべく、独奏、二重奏、バイオリンやフルートとの重奏など、いろいろな組み合わせの演奏も行います。

またメンバーは、それぞれいろいろな会合での演奏や喫茶店でのサロンコンサート、病院でのコンサートなどの機会をとらえて演奏活動をし、できる限りクラシックギター音楽の良さを知ってもらうべく努力しています。

そしてそのような活動の中からメンバー七名中、松居孝行君は二つの国内コンクールで一位、九二年東京国際ギターコンクールで六位、山中辰彦君は九州ギターコンクールで入賞、澤田卓志も九三年瀬戸大橋国際ギターコンクールで四位と、高知県ギター界のレベルアップのため成果も上げているこの頃です。

連絡先　高知市中万々一六二―二
電　話　〇八八八―七二―五二七三

## 「パレットクラブ」

### 若い仲間が支え合い

岸本　尚

平成四年の秋に、高知市青年センター主催で竹村文男先生のご指導のもと、「油絵教室」が催されました。パレットクラブは、三カ月間の教室終了後、その教室の元生徒十人で引き続き、青年センターのサークルとして活動を開始しました。

最初のうちは四方山話をするばかりで、なかなか制作に取り掛かりませんでしたが、そのうち一人、また一人と、筆を持ち、静かにキャンバスに向かうようになりました。しかし、皆の集中力が続くのもせいぜい一時間くらいのもので、プツリと緊張の糸が切れると、横の人の作品が気になって仕様が無くなり、最後には批評会が始まってしまいます。私達の批評会は他人に厳しく自分には甘く、という精神にのっとって行われますので、意見が出る度に、その精神を感じ取り皆で大笑いしています。こうして和やかにその日の活動は終了します。

今までに、青年大会と青年センター祭に出展させていただきました。青年大会では、我等がパレットクラブから優秀賞と佳作に、それぞれ一名ずつ選ばれました。また、センター祭の方は、展示するだけでしたが、知人の間では大変好評でした。自分の描いた作品を、広く一般の方々に見て頂くというのは、それだけでワクワクしてうれしいものです。

連絡先　高知市桟橋通二丁目一―五〇
　　高知市青年センター内
電　話　〇八八八―三一―四九三一

## 「英文俳句の会」

### 五・七・五のリズムを英訳で

木村　信夫

この一月で、「英文俳句の会」を高知市民図書館で始めてからちょうど二年になります。

その頃でも日本の原産である俳句は既に世界の人々から親しまれており、『HAIKU』という雑誌まで出ていたアメリカでは勿論、カナダ、イギリス、フランス、西ドイツ、スペイン、ポルトガル、サウジアラビア、そして中国などでもそれぞれの自国語で俳句が作られていたようです。

そこで、私は俳句を一緒に英訳しようと呼びかけたところ、十名位の仲間が集まりました。テキストには書店にあった『土佐の俳句』などを使用し、スタートしました。

訳法はコロンビア大学名誉教授D・キーンさんが説く、五・七・五の音節が基本になります。そしてこの手法は山口誓子氏もとられています。

会の活動は、自作の句を英訳するということにもありますので、ある参加者は自作を黒板に書いて、他の参加者に説明をしながら勉強をしあっています。

終わりに『土佐の俳句』から阿部孝先生（元高知大学学長）の一句を英訳してみますと、

秋空の深淵身をも投ずべし

The autumnal sky: I'm to throw myself into / The abysmal chasm. となります。

（・は音節を示す）

連絡先　高知市中万々一四六―三九
電　話　〇八八八―七二―七〇五〇

## 「紅墨会」

### 黒と白の芸術

坪田　春子

紅墨会は、昭和五十六年三月、市民学校から誕生しました。

県展日本画無鑑査和田薫先生のご指導のもとに、毎週一回、水曜日の午前十時から十二時まで、中央公民館で学んでいます。

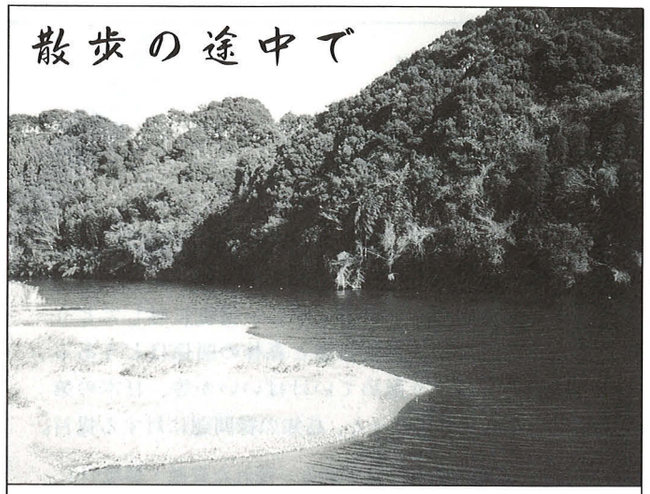
現在、会員は三十名、男性一人女性二十九名、結成以来続けている熱心な方から習い始めて数ヵ月の方まで、週に一度の出会いを楽しみに、作品を見せ合い、批評し合い、喜んだり、悩んだりして楽しく和やかなムードで学んでいます。

黒一色で濃淡、カスレ、滲み、ボカシと、一本の筆の表現に限りない魅力を感じます。

年に一度の発表会も、十一回を数え、今年も五月十五日から三十日まで開催しました。素朴なもの、枯淡の味わいのあるもの、躍動感のあるもの、皆それぞれに一生懸命書いた作品でした。



## 散歩の途中で



河川改修による護岸のコンクリート化で、私達の周辺でも川本来の姿を目にすることが難しくなった。

ここは岩ケ渕、自然の岸辺。朝倉堰からの水音がとどくこの鏡川左岸は、昔ながらの素晴らしい景観をとどめている。

水面では、羽を休めるカモ類の姿も見うけられた。

## 風伯

### 竹のはなし

わたしの家の近くの神田川から、直線距離にして八百メートルほど行ったところに、小高い丘がある。三、四軒の農家が屯している。まわりは孟宗竹・破竹・真竹が緑の共和圏をつくっている。

そこの農家のおばあさんが、春さきになるとリヤカーに野菜や筍を積んで売りに来たものだ。わたしも家内も筍が好物だから、おばあさんから再さい買った。

おばあさんの筍はめっぽうう まい。煮もの、朝掘りの筍はめっぽうう まい。煮もの、木の芽あえ、筍ごはんにしつらえてよくたべた。そのおばあさんが数年まえから姿をみせなくなった。ひっそりと亡くなってしまったらしい。いらい、朝掘りの筍にありつくことは絶無にちかい。いまでも舌の先に、おばあさんの余韻がちょっぴりのこっている。

さて、筍の親分の竹のことだが、植物のなかで最も強靱なのが竹である。真竹を一ヘクタールに七千本から一万五千本植えるとすると、何十年もたつと地下茎の長さは、六万三千メートルから十七万メートルに達するという。だから竹の茎で地盤が強固になる。したがって山崩れや、集中豪雨の土石流（山津波）の懸念はまずない。地震からも身を守ってくれる。

むかし中国で、七人の賢者が竹林のなかで、酒を酌みかわしながら、心おきなく琴を弾き、詩を競作し、談論に興じたというのも、竹林が身辺警護の役割をしてくれたからだろうか。

わたしの畏友で、竹を愛した詩人、故立仙啓一は、わが家を「孟宗竹林荘」と名付けた。その拾遺詩集に「竹の歌」がある。

竹を切る。／竹はワンとも ニャンともいわぬ。／竹には顔がある。／竹には足がある。

（渾・沌）

その間、一、四二七人の方が見に来て下さいました。その中に珍しく中国の書家の先生方もおられ、ほんとにびっくりしたことでした。

六月二日、慰労会と反省会を全員参加で行いました。日頃の精進と、作品の批評や忙しかったことなど、話に花が咲き、ますます仲間意識が深くなったように感じました。

伝統の水墨画、これからも仲間との出会いと大切に楽しく学びたいと思います。

連絡先　高知市一宮二八三五―一
電　話　〇八八八―四五―二三四六

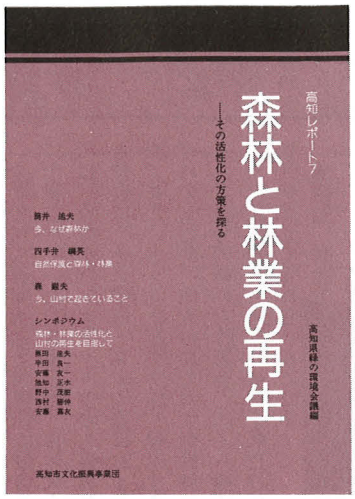
新刊案内

高知レポート７　　高知県緑の環境会議編

# 森林と林業の再生

## ―その活性化の方策を探る

Ａ５・152頁・定価1,000円(税込)




森林と林業そして山村をとりまく厳しい環境に対してどう対処していけばいいか、自然保護と森林の関係はどうあるべきか、村おこしはどう進めていけばいいか等、日本の第一人者が語る森林と林業の今と、高知の緑問題に対する提言。

内容／第１章　高知の森林・緑を創る－優れた資源・環境づくりへの提言－高知県緑の環境会議／第２章　今、なぜ森林か－筒井迪夫／第３章　自然保護と森林・林業－四手井綱英／第４章　今、山村で起きていること－森からの村おこしを考える－森巌夫／第５章　シンポジウム〈森林・林業の活性化と山村の再生を目指して〉森林・林業・山村をとりまく厳しい環境－黒田迪夫：日本林業の進路－半田良一：大きく変化する消費地市場－安藤友一：国産材の需要拡大－池知正水：東海地域・海山町の事例－野中茂樹：土佐町の事例－西村勝仲：林業・山村の振興と国民的課題－安藤嘉友

新刊

# 高知のエスプリ

## ―ふるさとの未来(あす)を考える―

Ａ５判・160頁・定価1,200円（税込）

「文化高知」の創刊号から50号までの巻頭頁をまとめた書。こうして一書にまとめると、それぞれの文章が機関誌掲載時とはちがった感動をよぶとともに、底流にあって響きあうものが、重い説得力となっていることを教えられる。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 山岡　亮一 | 横山　龍雄 | 竹内三賀男 | 橋井　昭六 | 古谷　俊夫 |
| 木原　正雄 | 関田　英里 | 俵　壽太郎 | 中内　光昭 | 芹沢　寿良 |
| 山本　　和 | 岡村　一雄 | 岡村　　大 | 西山　俊彦 | 山崎　和孝 |
| 田中　俊樹 | 高塚準一郎 | 草野　英治 | 辻　　隆造 | 筒井　直和 |
| 藤田　　司 | 岡田　　盛 | 竹内　澄夫 | 池川　順子 | 西森久米太郎 |
| 竹内　和夫 | 杉本　价寛 | 岩崎　令子 | 吉村　泰輔 | 岡本　純一 |
| 中村　雄一 | 清水　　泉 | 入交太二郎 | 山田　一郎 | 川野　忠顕 |
| 森本　正紀 | 近藤　　勝 | 吉村　雄治 | 藤戸　せつ | 安藤　禎彦 |
| 中島　　暁 | 丹宗　朝子 | 佐藤　幸男 | 川崎　昭典 | 岸本　宇根 |
| 吉村　眞一 | 澤村　拓夫 | 古橋　賢造 | 竹村維早夫 | 町田　　貴 |

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL(0888)73－4365　郵便振替 徳島 8-14869